

京都・時を旅して

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター設立20周年記念特別展覧会



平成12年10月1日～29日

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

ご あ い さ つ

昭和56(1981)年4月に業務を開始しました(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターは、今年度で設立20周年のふし目を迎えました。この20年間、埋蔵文化財を取り巻く社会的状況は大きく変化し、文化財の保存と同時に活用を図ることも、一層大きな課題となってまいりました。京都府においても、遠所遺跡・浦入遺跡・私市円山古墳・奈良山瓦窯跡群などの大規模調査が行われましたが、今後、これらの文化財をひろく府民の皆様に伝えていくことが当調査研究センターの重要な使命と考えております。

こうした社会的な要請に応えまして、当調査研究センターの設立20周年を記念して、「京都・時を旅して」と題する本展覧会を開催することにいたしました。当調査研究センターの発掘調査成果を中心に、古代から近世までわかりやすい展示を心がけました。

本展の開催にあたり、共催団体としてご協力いただいた京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館、ならびにご協賛いただいた向日市文化資料館、貴重な文化財をご出品いただいた岩滝町教育委員会・山城町教育委員会および府内諸機関の方々、ご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様に心から厚くお礼申し上げます。

2000年10月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 樋口 隆 康

京都・時を旅して……………	2	7. 地方の役所……………	14
1. 石器の世界……………	2	8. ものをつくる……………	15
2. 土器からみた時代の流れ……………	3	9. 中世のくらし……………	18
3. いのりとまつり……………	7	10. 近世の京都……………	20
4. 王墓の誕生……………	8	京都・古代の輝き……………	21
5. 大王の時代……………	9	展示品リスト……………	24
6. みやこの風景……………	12		

卷頭カラー 1



(1) 高山 12 号墳出土の金銅装双龍環頭大刀柄頭



(2) 聚楽第城下大名屋敷出土の金箔瓦

巻頭カラー 2



(1) 大風呂南1号墓出土のガラス釦

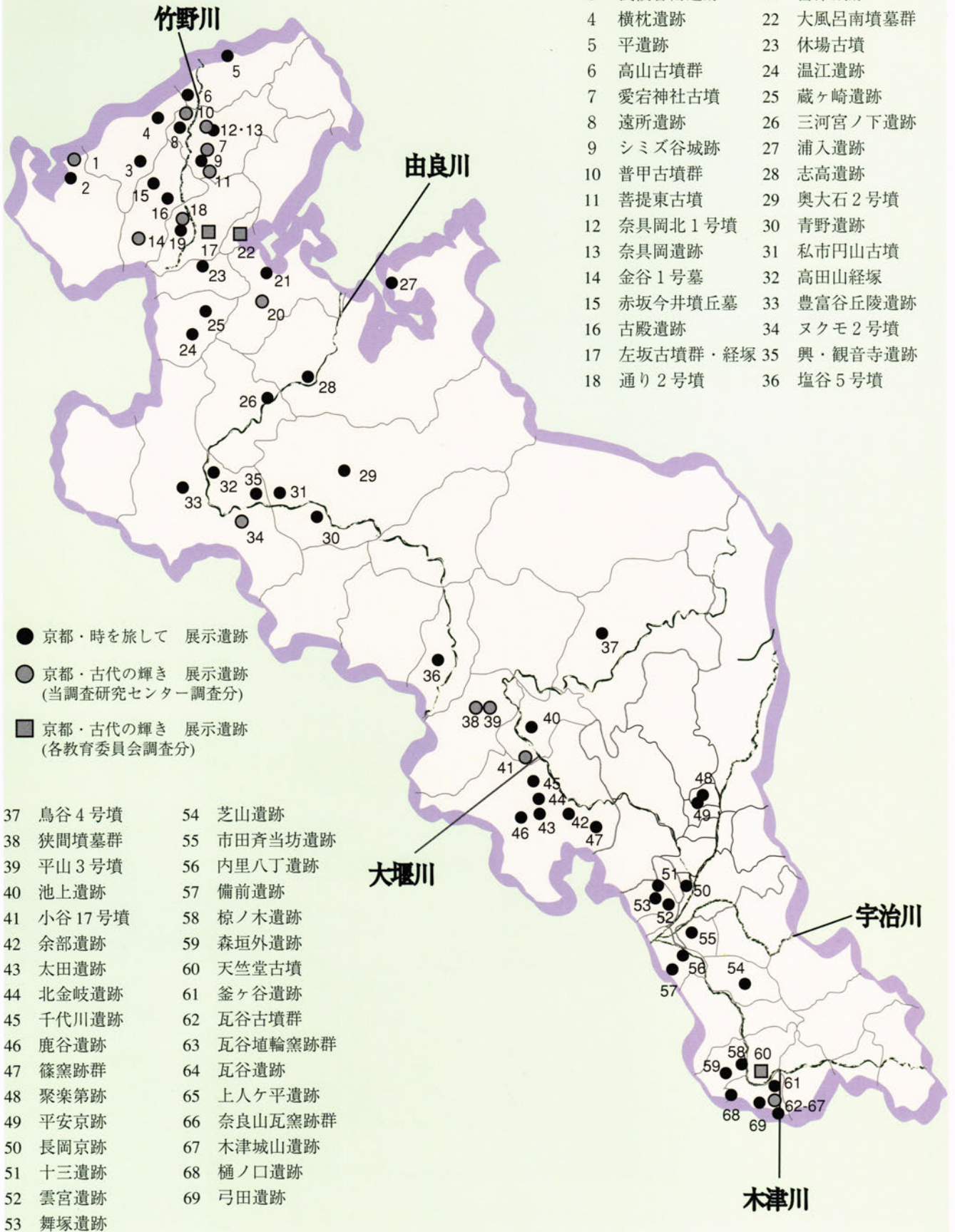


(2) 奈具岡遺跡出土の水晶玉製作関係遺物

凡 例

1. 本書は、平成 12 年 10 月 1 日～29 日に向日市文化資料館で開催する(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター設立 20 周年特別展覧会「京都・時を旅して」の展示図録である。
2. 展示資料は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが、昭和 56(1981)年度～平成 11(1999)年度に発掘調査を行った遺跡・遺物を対象としたほか、京都府教育委員会・岩滝町教育委員会・山城町教育委員会が発掘調査された資料を展示した。
3. 展示資料中、都合により員数等が異なる場合がある。
4. 資料調査、図録作成、展示資料借用に当たっては、次の機関・個人からご指導・ご協力を受けた(順不同・敬称略)。
久美浜町教育委員会・丹後町教育委員会・峰山町教育委員会・大宮町教育委員会・宮津市教育委員会・岩滝町教育委員会・野田川町教育委員会・加悦町教育委員会・舞鶴市教育委員会・福知山市教育委員会・綾部市教育委員会・丹波町教育委員会・八木町教育委員会・亀岡市教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・城陽市教育委員会・久御山町教育委員会・八幡市教育委員会・木津町教育委員会・山城町教育委員会・京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館・早川和子・村上優美子
5. 本年 4 月から当調査研究センターの発掘品の多くが地元市町の保管となった。
6. 本書は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第 1 課が作成した。

展示遺跡の位置



京都・時を旅して

1. 石器の世界



旧石器
(長岡京市長岡京跡・同舞塚遺跡・
同十三遺跡・久美浜町鳥取城跡)

人類の誕生

人類の誕生は、300万年前とも500万年前ともいわれています。アフリカ大陸の一角で誕生した人類は、その後、世界各地に広がっていきました。

日本列島では、60万年以上前とされる石器が宮城県上高森遺跡かみたかもりでみつかり、このころ、すでに人類がいたことがわかってきました。

狩猟・採集の生活

旧石器時代の人々は、狩猟しゅりょうを中心とする移動生活をおくっていたと考えられます。たとえば向日丘陵周辺むこうでは狩猟のための槍先や、獲物を切り分けるナイフのような石器がみつかります。

縄文時代の人々も、狩猟・採集・漁撈ぎょうらうなどを中心とした生活をしていました。たとえば、石の鏃やじりや槍先、骨製の釣り針、あるいは獲物を捕るための落とし穴などがみつかります。また、採集した木の実をたくわえる貯蔵穴ちようぞうけつもつくられました。

このように、狩猟・漁撈の生活をしてきた縄文時代ですが、ドングリやクリなどの豊かな植物質食料の恵みを受けながら、長期にわたって定住生活をおくっていたことが、青森県三内丸山遺跡さんないまるやまの調査などで明らかになってきています。



縄文時代の集落の復原想像図(城陽市森山遺跡もりやま)

2. 土器からみた時代の流れ

縄文時代～古墳時代

土器は、人々の日常の生活に欠かせない道具です。土器には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などがあり、長い年月の間に形や文様、焼き方が大きく変化します。考古学では、こうした土器の形や文様の变化で、いつ頃の時代のものか判断しています。また、土器は当時の生活を知るための貴重な資料です。

縄文土器

1万年以上前、人々は土器を用いるようになりました。この最初の土器、縄文土器の表面には、より紐による縄目のような文様がありました。

人々は、縄文土器を利用して木の実や肉などを煮たり、盛りつけたりしました。



縄文時代前期の土器(舞鶴市志高遺跡^{しだか})

縄文時代も終わりに近づくと、西日本では、表面に縄文をほどこさなくなり、土器の形も簡素になりました。

土器は、棺やまつりに使うなど、煮炊きや盛りつけ以外の用途にも使われるようになりました。



縄文時代前期の丸木舟(舞鶴市浦入遺跡)

舞鶴市浦入遺跡^{うらにゅう}では、北陸地方の石で作られた耳飾りや、隠岐島の黒曜石^{こくようせき}などが縄文時代前期の丸木舟^{まるきぶね}とともに見つかりました。

丸木舟はこうした遠くの地域との交流に一役かったのでしょうか。



縄文時代晩期の土器(丹後町平遺跡^{へい})



弥生時代前期の土器(長岡京市雲宮遺跡^{くもみや})

弥生土器

今から約2400年前、大陸(朝鮮半島・中国)から、稲作や金属器などの新しい文化をもった人々が、北部九州にやってきました。彼らのもたらした土器と在来の縄文土器が融合して新しく弥生土器が生まれました。

あらしの時代

弥生時代には、大きな溝をめぐらして集落を守る環濠集落^{かんごうしゅうらく}がつくられるようになりました。

また、石の鍬^{やじり}や剣で殺された人々の墓が見つかることもあります。

このように、弥生時代は、人々が農地や水などをめぐってあらしの時代と考えられています。



水田の跡(八幡市内里八丁遺跡^{うちさとほちょう})

稲作は開始当初からすでに高い技術を持っていたことが、灌漑用水路^{かんがい}や道具からわかっています。発掘調査では、水田の畦^{あぜ}や稲株^{いなかぶ}の痕跡が見つかることがあります。



石 剣
(舞鶴市志高遺跡・亀岡市太田遺跡^{おおた}・久御山町市田齊当坊遺跡^{いちださいとうぼう})

石剣^{せっけん}は、金属(青銅・鉄)製の剣をまねて石で作ったもので、集落どうしの戦いや戦勝祈願のまつりなどに用いられました。

環濠集落と高地性集落

弥生時代の集落は、さきほどの環濠集落のほかに高地性集落とよばれるものもあります。環濠集落は、平地につくられたものが多く、大きな溝を二重あるいは三重にめぐらしています。また、高地性集落は、平野部や海岸を見渡せる丘陵の上につくられ、見張り場所や砦のような役割をもっていたと考えられます。どちらも争いにそなえて営まれたものでしょう。

『漢書』にみえる「分かれて百余国を為す」や『後漢書』にいう「倭国大乱」を表すものと考えられています。

女王卑弥呼

『魏志倭人伝』によれば、倭国大乱のち、諸国から共立されて邪馬台国の女王となりました。そして魏の皇帝に使いを送り、金印や鏡などをもらいました(239年)。

卑弥呼の時代は、弥生時代の終わりごろにあたり、邪馬台国を中心とした連合政権が生まれており、やがて古墳時代へと発展していく直前の時期と考えられています。



高地性集落(木津町木津城山遺跡)

木津町木津城山遺跡は、南山城盆地を一望できる丘陵の営まれた高地性集落です。竪穴式住居跡がみつかったほか、集落を取り囲む環濠もみつかりました。また、中世には山城としても利用されました。



弥生時代後期の土器(八幡市備前遺跡)

弥生時代後期には、土器は小さくなり、形も多様になります。また、食物を盛りつける鉢や高杯が住居跡から多く出土するようになります。



古墳時代前期の土器(木津町瓦谷遺跡)
かわらだに

土師器と須恵器

今から1700年ほど前には、奈良盆地東南部(現在の天理市・桜井市)を中心に巨大な古墳が造られ、日本各地に広がっていきました。

古墳時代前期には、弥生土器から発達した土師器を使っていました。土師器は、煮炊きや貯蔵、食物の盛りつけなどのほか、埋葬のための儀礼や村のまつりなどにも使用されました。

「倭の五王」の時代

古墳時代中期には、古墳文化は最盛期を迎え、仁徳陵古墳のように世界最大級の古墳が造られました。この時代は、大陸との交流が本格的になり、さまざまな文化・技術が入ってきました。その一つとして、朝鮮半島から伝わった硬質の土器、須恵器があります。須恵器は、またたく間に日本各地に広がりしました。



朝鮮半島から伝わった陶質土器
(弥栄町奈具岡北1号墳)
なぐおかきた

陶質土器は朝鮮半島で作られたもので、日本の須恵器の原形となりました。これらは日本との交流を通じてもたらされたものでしょう。

古墳時代の終焉

古墳時代のおわりごろには、朝鮮半島の百済から仏教が伝わり、各地の豪族が古墳の築造をやめて、寺院を造るようになりました。やがて中国の律令制度や都城制などを取り入れて、「天皇」を頂点とする古代国家が成立しました。



古墳時代後期の土器(精華町森垣外遺跡)
もりがいと

3. いのりとまつり

人々は、太古の昔から、さまざまなものを対象に、いのりとまつりを行ってきました。たとえば、縄文時代の土偶には子孫繁栄のいのりが込められていることは、よく知られています。

弥生時代になると、作物の豊穰をいのりまつりも行われるようになりました。銅鐸どうたくを用いたまつりもそのひとつです。

また、かわった形の分銅形土製品なども、こうしたまつりに使われたと考えられています。



分銅形土製品
(福知山市興・観音寺遺跡)



導水施設 (網野町浅後谷南遺跡)

まつりは対象物によって、さまざまな場所でとり行われました。

網野町浅後谷南遺跡あさごだにみなみでは、丘陵から流れ出る谷川の水辺で、きれいな水を得るための導水施設どうすいしせつとともにさまざまな祭具がみつかりました。

古墳時代には、農耕に欠かすことのできない水を対象としたまつりが行われていたようです。

奈良時代になると、法令によって、祭具にもさまざまな規定が加えられました。

代表的な祭具として人間や馬をかたどった小型の土製品や木製品、さらに土器に人の顔を描いたもの(墨書人面土器ぼくしょじんめんどき)などがあります。これらは厄除けやまじないなどに使われました。



墨書人面土器・土馬ほか(木津町釜ヶ谷遺跡)

4. 王墓の誕生



方形周溝墓(大山崎町下植野南遺跡)
しもうえのみなみ

弥生時代の墓

弥生時代には、ほうけいしゅうこうぼ 方形周溝墓や ほうけいだいじょうぼ 方形台状墓と呼ばれる四角い形の墓がたくさん造られました。これらの多くは1つの墓にたくさんの木棺を埋めており、家族のための墓と考えられています。

巨大墳丘墓の出現

やがて、他の墓に抜きん出た規模や特殊な形、貴重な品々を副葬した墓が造られるようになります。このことは特定の人物を厚く葬るようになったことを表しています。

そして、弥生時代のおわりごろ(約1800年前)には、全国各地に巨大なマウンドをもつ ふんきゅうぼ 墳丘墓が出現します。



巨大な墳丘墓(峰山町赤坂今井墳丘墓)
あかさかいまい

赤坂今井墳丘墓は、一辺38mを測る方形の墳丘墓です。弥生時代のおわりごろの墳丘墓としては京都府内でも屈指の規模を誇ります。

弥生時代の墓には、ほかにもマウンドに石を貼り付けた はりいしぼ 貼石墓や、方形のマウンドの四隅が突出した よすみとっしゅつぼ 四隅突出墓などがあります。

貼石墓(舞鶴市志高遺跡)



5. 大王の時代

古墳時代は、「大王」を頂点とする豪族の連合政権が日本列島の大半を治めていました。

各地の豪族は、大小さまざまな前方後円墳や円墳・方墳などを築造して、その地位を表しました。

全長 200 m 以上の古墳は全国で 35 基ほどしかありません。一方、10 m に満たないような小さな古墳は全国各地にたくさんあります。特に古墳時代後期に横穴式石室よこあなしきせきしつが造られるようになると、古墳の数は飛躍的に増大しました。

古墳時代の約 400 年間に全国で造られた古墳の数は 10 万基とも 20 万基ともいわれています。



復原整備された私市円山古墳(綾部市教育委員会提供)

綾部市私市円山古墳きさいちまるやまは、高速道路の建設に伴う発掘調査によって見つかった直径 70 m の大型円墳です。現在は、写真のように築造当時の姿に復原整備され、古墳公園として公開されています。



古墳時代前期の甲冑かっちゅう(木津町瓦谷古墳)



古墳時代中期の甲冑(綾部市私市円山古墳)

* 上記の甲冑はいずれも京都府立山城郷土資料館において保存処理の上、復原しました。

権威の象徴

古墳には多くの品物が副葬されました。これらは、鏡や玉類などの呪術的なものや、剣・刀・鏃・甲冑などの武器・武具、馬具などがありました。これらは古墳の被葬者である首長の権威の証^{あかし}として一般の人々に示されたのでしょう。

古墳時代は、このような甲冑や鉄鏃・馬具の存在から、武人のイメージが強く浮き出てきます。この傾向は、古墳時代のおわりごろになると、さらに強調され、刀につける金銅製の柄飾り(巻頭カラー参照)なども作られるようになります。



鉄鏃(弥栄町奈具岡北1号墳)

だこうけん おくおおいし
蛇行剣(綾部市奥大石2号墳、
綾部市教育委員会提供)



粘土槨と木棺直葬(木津町瓦谷1号墳)

さまざまな埋葬方法

古墳の形には前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などがあることはよく知られていますが、埋葬にもいろいろな方法がありました。

瓦谷1号墳の埋葬施設では、粘土で木棺をくるんでしまう粘土槨^{ねんどかく}と、木棺を直接埋める木棺直葬^{もっかんじきそう}がありました。

高山12号墳では、巨大な石を積み上げて石の部屋(横穴式石室)を造り、その中に木棺をおさめました。

左坂横穴群では、山の斜面に横穴をくりぬいて部屋を造り、そこに遺体を安置しました。



横穴式石室(丹後町高山12号墳)



横穴(大宮町左坂横穴群)

埴輪の世界

埴輪は、古墳時代前半には、円筒埴輪や蓋・盾などをかたどった器財埴輪がたくさん用いられます。古墳に埋葬された首長の靈魂を悪霊から守るために立てられたと考えられています。

古墳時代後半になると、馬や犬をかたどった動物埴輪や人物埴輪が多く用いられるようになりました。関東地方では、これらの埴輪をならべて、まつりのようなものを表現したものもあります。

巫女と考えられる女性をかたどった人物埴輪です。髪型や服装、あるいは装身具の身に付け方など、今から1500年前の女性のファッションを知ることができます。



巫女形埴輪(丹波町^{しおたに}塩谷5号墳)



古墳時代前半の埴輪(木津町瓦谷古墳群)



馬形埴輪の出土状況(木津町^{ゆみでん}弓田遺跡)



古墳時代後半の埴輪(木津町弓田遺跡)

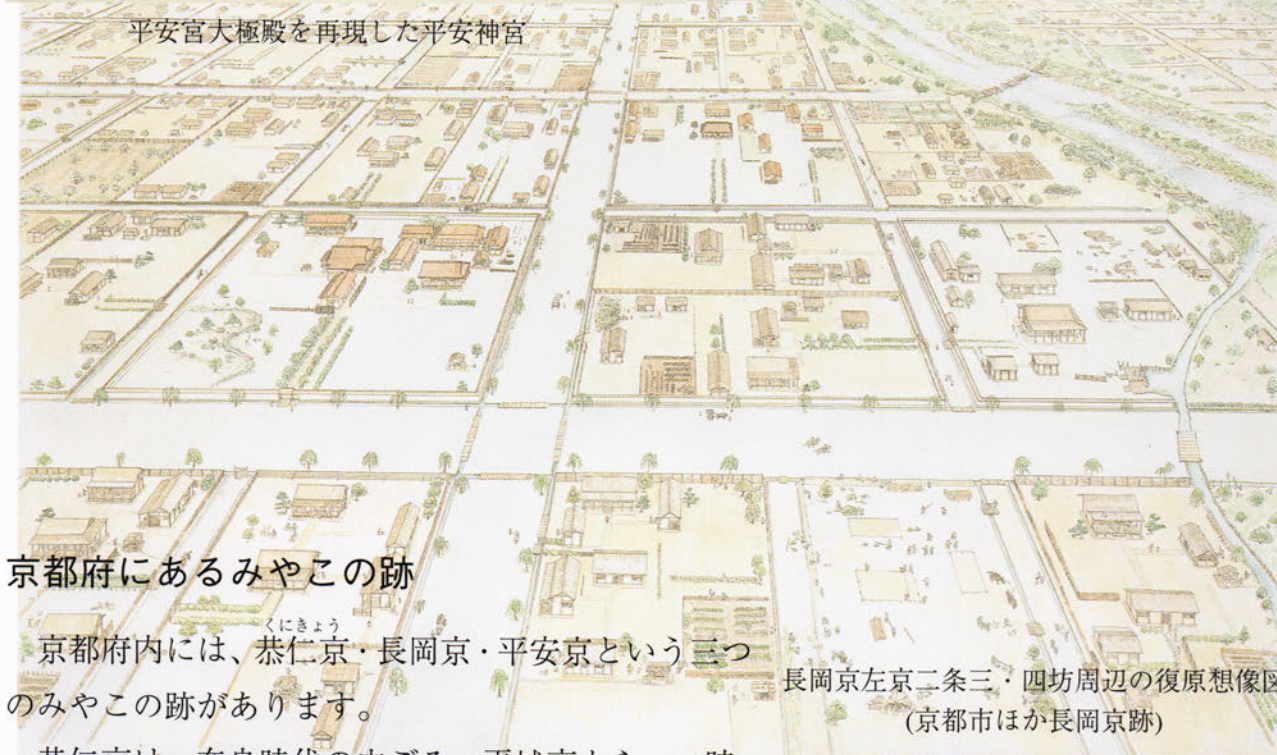
6. みやこの風景

飛鳥時代のおわりごろ、中国の都城をまねた立派なみやこが造営されました(694年)。現在、^{ふじわらきょう}藤原京と呼ばれるこのみやこは、天皇が住まいする建物や役人たちが政務を行うさまざまな役所を含む「宮」と、その周囲を碁盤の目のように区画された「京」と呼ばれる街区からなっていました。こうした形態は、その後も^{へいじょうきょう}平城京・^{ながおかきょう}長岡京・^{へいあんきょう}平安京へと受け継がれました。



平安宮大極殿を再現した平安神宮

平安神宮は、平安宮^{だいごくでん}大極殿を8分の5の大きさに再現したものです。屋根には緑色の^{うわぐすり}釉薬を掛けた瓦を葺き、これを支えるために巨大な礎石の上に立てた太い柱は朱色に塗られていました。



長岡京左京二条三・四坊周辺の復原想像図
(京都市ほか長岡京跡)

京都府にあるみやこの跡

京都府内には、^{くにきょう}恭仁京・長岡京・平安京という三つのみやこの跡があります。

恭仁京は、奈良時代の中ごろ、平城京から、一時、遷されたもので(740～743年)、現在の加茂町に宮を置き、周囲の木津町から山城町にかけて京域が広がっていたと考えられています。

長岡京は、平城京から遷されましたが、わずか10年と短命なみやこでした(784～794年)。現在の京都市の南西部から向日市・長岡京市一帯にありました。

平安京(794年遷都)は、よく知られているように、現在の京都市にあったみやこで、「千年のみやこ」と呼ばれるように、長期にわたって営まれました。



恭仁宮の瓦(京都府立山城郷土資料館提供)

人々の暮らし

「京」のなかには貴族をはじめ、さまざまな人々が生活していました。彼らには、その身分に応じて定まった広さの宅地が与えられており、^{しんでんづくり}寝殿造と呼ばれる立派な建物配置をしたものから、掘立て小屋のような小規模なものまで、さまざまな宅地の跡がみつっています。

そこで使用されていた土器をはじめとする生活用品には、釉薬をかけ、当時としては目をみはるような美しさをもった茶碗や皿などが多くあります。貴族たちが好んで使ったのでしょう。



平安時代前期の土器(京都市平安京跡)

役所と役人

「宮」は、現在の国会議事堂や各省庁の建物、そして皇居を含んだ一画にあたり、そこでは、さまざまな政務が行われていました。これを示すように数多くの文字資料がみつっています。銅印や木印といった古代のハンコや、木簡^{もっかん}と呼ばれる短冊状に切った木の板に墨で文字を書いたものなどです。

また、役人たちは、自分たちの身分をベルトの飾りなどで示していました。発掘調査では、石製や銅製のベルトの飾りがみつかることがあります。



木簡(長岡京市更ノ町遺跡)
^{ふけのまち}



銅印(京都市長岡京跡)



せきたい おびかなぐ
石帯・銅製帯金具
(^{よこまくら}網野町横枕遺跡・^{しょうがき}大宮町正垣遺跡
^{しばやま}亀岡市太田遺跡・^{しばやま}城陽市芝山遺跡)

7. 地方の役所

奈良時代から平安時代には、全国各地に国・郡・里(郷)とよばれる行政区分が設けられていました。国は現在の都道府県、郡は市町村におよそ相当します。そして、国や郡には、それぞれの役所が置かれていました。国の役所を国府こくふ、郡の役所を郡衙ぐんがと呼びます。また、みやこの近隣には皇族の別荘としての離宮りきゆうなども設けられていました。



地方の役所跡から出土した文字資料
(亀岡市千代川遺跡)

亀岡市千代川遺跡は、古代丹波国の役所(丹波国府)跡の推定地のひとつです。発掘調査では、多くの建物跡とともに、木簡ぼくせんや墨書土器がみつっています。

古代亀岡盆地の復原想像図(丹波国府と丹波国分寺・国分尼寺)



三彩土器(木津町樋ノ口遺跡)

木津町樋ノ口遺跡ひのくちでは、土塀(築地塀)や建物跡とともに、二彩・三彩と呼ばれる2～3色の釉薬をかけた土器がみつかりました。離宮跡もしくは寺院跡ではないかと考えられています。

8. ものをつくる

近年の発掘調査で、京都府内では、古代において塩・鉄・土器・瓦などさまざまなものを、大規模に生産していたことが明らかになり、全国的にも注目されています。

うらにゆう

浦入遺跡での塩づくり

舞鶴市の北東、大浦半島には、奈良時代から平安時代にかけて大規模に行われていた塩づくりの遺跡が分布しています。

発掘調査が行われた浦入遺跡では、海水を煮立てて塩を得るために使った土器(製塩土器)の破片や炉の跡が、海岸から数多く見つかりました。



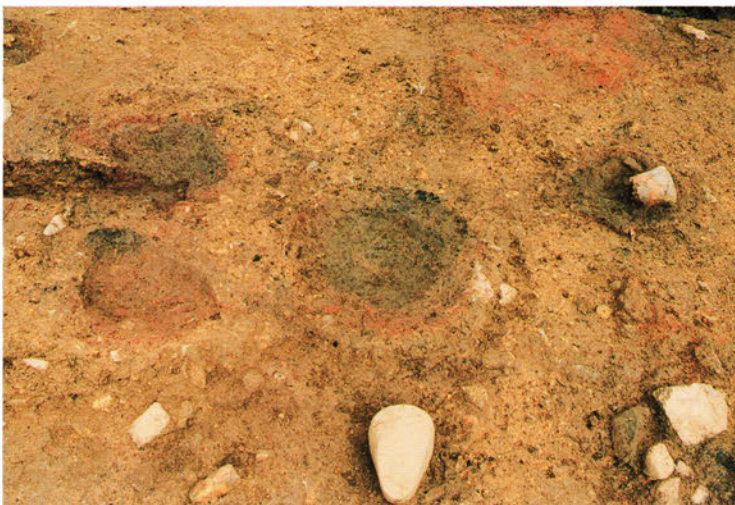
製塩土器の出土状況(舞鶴市浦入遺跡)

古代の塩づくりは、土器に海水を入れて煮詰めるという方法で行われました。浦入遺跡では、細長い土製の台(支脚)の上に海水を入れた椀形の土器(製塩土器)を載せて、そのまわりで火をたいて塩をつくりました。

浦入遺跡での土器を使った塩づくりは鎌倉時代の初めごろまで行われ、その後、鉄製の釜などを使うようになりました。



製塩土器と支脚(舞鶴市浦入遺跡)



鍛冶炉跡(舞鶴市浦入遺跡)

また、浦入遺跡では鍛冶炉の跡がたくさんみつかり、塩づくりとともに鉄器の生産を行っていたこともわかりました。

ならやまがよう
奈良山瓦窯跡群での瓦づくり



瓦を焼いた窯(木津町梅谷瓦窯跡)

現在の奈良県との府県境となっている木津町の奈良山丘陵一帯には、奈良時代に平城京などへ瓦を供給するために設けられた瓦窯の跡が数多く分布しています。

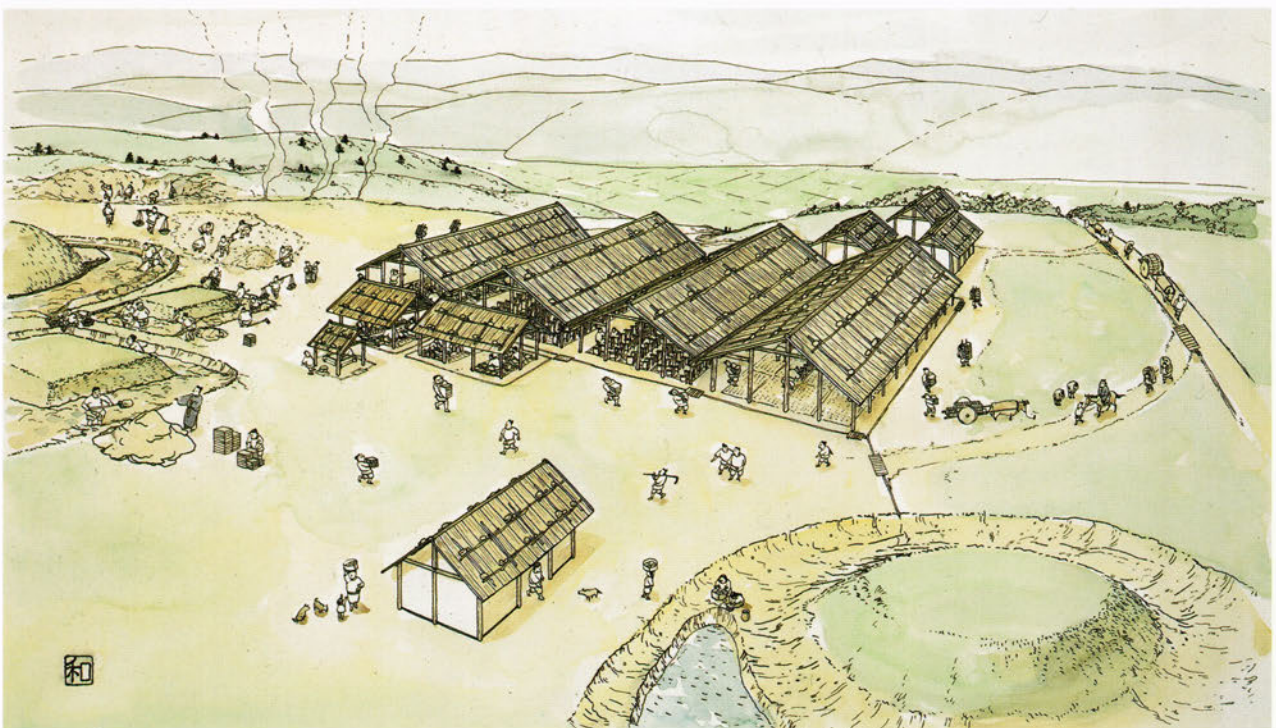
平城宮へ瓦を供給した市坂瓦窯跡群いちさかがようや興福寺へ瓦を供給した梅谷瓦窯跡群うめだにがようなどがみつかっています。



出土した軒丸瓦・軒平瓦(木津町五領池東瓦窯跡)ごりょういけがし

市坂瓦窯跡に隣接する上人ヶ平遺跡しょうにんがひらでは、瓦を造るための工房跡がみつかっています。

上人ヶ平遺跡では近くで良質の粘土が採れ、周囲に残っていた古墳の溝を利用して粘土をこね、建物の中で瓦を作りました。みつかった建物は大きさのわりに柱が小さく、簡単な構造の建物と考えられます。



瓦工房跡の復原想像図(木津町上人ヶ平遺跡)

えんじょ

遠所遺跡での鉄づくり

丹後半島の中央、竹野郡弥栄町では、古墳時代のおわりごろから平安時代にかけて、大規模な製鉄が行われていました。

遠所遺跡をはじめとする多くの遺跡で、製鉄炉や製鉄に使用する多量の炭を作るための炭窯、生産した鉄を製品にするための鍛冶炉などが、広い範囲で見つかりました。



製鉄遺跡の復原想像図(弥栄町遠所遺跡)

上の図は、遠所遺跡における製鉄作業の様子を描いたものです。砂鉄を溶かして鉄のかたまりを作ったり、鉄を加熱し叩いて製品を作ったりしています。

しの

篠窯跡での土器づくり

京都市から老ノ坂峠を越えてすぐ、亀岡市篠町一帯の丘陵には、奈良時代から平安時代の須恵器を焼いた窯の跡がたくさん分布しています。その多くは平安京の人々へ土器を供給していたものであることが明らかになりました。また、釉薬をかけた緑釉陶器と呼ばれる緑色をした土器を生産した窯もありました。



砲弾形・おむすび形の窯跡(亀岡市西長尾5号・6号窯)

須恵器の窯跡は、山の斜面を利用した長さ6～9m・幅1～1.5mの細長い登り窯が一般的ですが、篠窯跡群では、一辺が1.5～1.8mを測る砲弾形やおむすび形をした特殊な形の窯跡もあります。



緑釉陶器(亀岡市黒岩1号窯)



篠窯跡出土の須恵器

9. 中世のくらし

武士の時代

平安時代のおわりごろには、武士が政治の実権を握るようになり、源頼朝みなもとのよりともが征夷大將軍せいいたいしょうぐんに任命されると(1192年)、名実ともに武家政権が成立しました。

このように、武士が政権を握った中世では、武士にとって武芸のたしなみは大事なことでした。その一方で、古代の貴族の生活をまねるようになりました。



武士は、防御のための堀や土塁に囲まれた屋敷に住んでいました。その生活ぶりは京都の土師器の皿をまねたものを使うなど、みやこを意識したものでした。京都では、日々のくらしに使われた皿も、京都を離れると、儀式などの場で使用されることもあったようです。

武士の屋敷の復原想像図(福知山市大内城跡)おおち



中世京都の土器(京都市内の各地)

中世の京都

中世の京都には、上京と下京の二つのまちがあり、その周辺には田園風景が広がっていました。

人々は、土師器の皿を多用し、中国製の白磁はくじの壺や青磁せいじの椀などを食器として使っていました。また、煮炊きには土師器や瓦器がきの羽釜はがまを使っていました。

地方のむら

中世のむらは、田畑を方形に区割りし、その一角に屋敷を構えていました。

こうしたむらでも、京都の人々と同じような食器を使っていましたが、碗は黒い瓦器でした。白磁の壺や、青磁の碗もありましたが、墓に供えられたことから、貴重品であったようです。



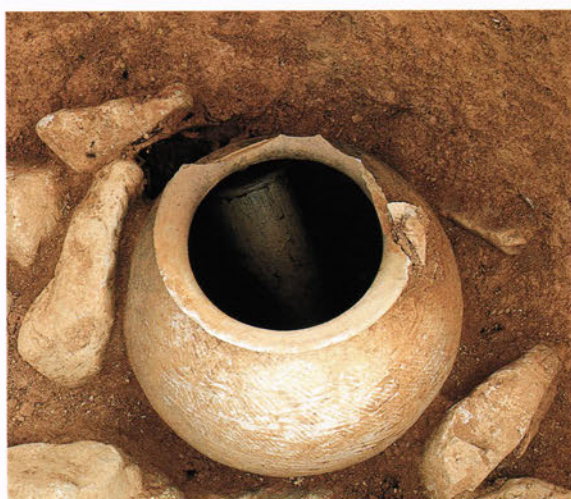
地方のむらの土器(精華町椋ノ木遺跡)^{むくのき}

浄土へのいのり

平安時代のおわりごろに、お釈迦様が亡くなってから2000年がたつと世の中が乱れるという考え(末法思想)^{まっぽうしそう}が広がりました。そして、死後の世界での幸せを願う浄土信仰^{じょうどしんこう}が広まり、^{きょうてん}経典を後世に残そうとしました。実際には、^{きょうづか}経典を銅製などの容器に入れて山の上などに埋納するものです。これを経塚と呼んでいます。

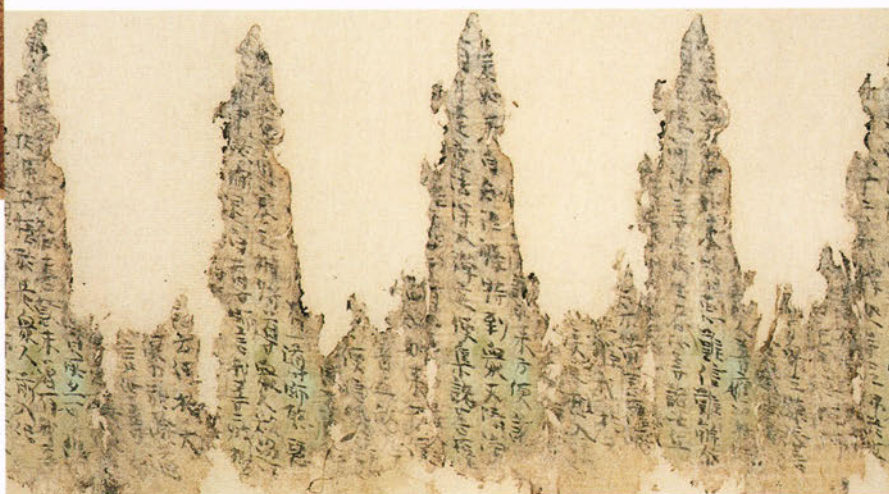


経典と一緒に埋納された青磁小壺
(福知山市高田山経塚)^{たかだやま}



経塚の出土状況(福知山市大道寺経塚)

^{だいどうじ}大道寺経塚では、一部ですが、^{ほっけきょう}経典が残っていました。経典は、法華経8巻・^{あみだきょう}阿弥陀経1巻とわかりました。字体や紙質などから12世紀代のものと推定されます。



腐蝕せず残っていた経典(福知山市大道寺経塚)

10. 近世の京都



現在に残る御土居の跡

御土居は、京都のまちを囲む大きな土塁のことです。総延長は23kmもある長大なもので、聚楽第を中心とした京都のまちを守るためのものでした。

近世の幕開け

おうにん
応仁の乱(1467～1477年)によって京都のまちは破壊されましたが、上京と下京を中心として復興しました。

その後、京都のまちは、織田信長の支配をへて、豊臣秀吉の大改造によって大きく変化しました。豊臣秀吉はじゅらくだい聚楽第や大名屋敷の建設、くげまち公家町の再編成、京都のまちを囲む土塁(御土居)と堀の構築などを行いました。その結果、中世の京都の面影を残さない、全く新しい京都のまちが生まれました。

発掘調査では、聚楽第やその周囲の大名屋敷の跡がみつかり、多くきんぱくがわらの金箔瓦(巻頭カラー参照)などが出土しています。

近世陶磁器の展開

江戸幕府の成立後、陶磁器の世界が一変します。おりべし織部や志野に代表される桃山陶器が京都のまちでは、大量に消費されました。これらの食器や茶道具の出現によって、現代に受け継がれる陶磁器の世界が幕を開け、古代からの主要な食器や灯明皿であった土師器は、その役割を終えることになりました。



近世京都の陶磁器(京都市内の各地)

京都・古代の輝き

装身具そうしんぐの代表 玉

玉は、古代の人々がもっともよく利用した装身具(アクセサリー)です。玉を身につけることは、はるか旧石器時代にまでさかのぼります。縄文時代の人々は翡翠ひすいをはじめとするさまざまな石や貝殻、動物の骨などから玉を作りました。

弥生時代になると、碧玉へきぎよくや緑色凝灰岩りょくしょくぎょうかいがんを使って玉が作られるようになりました。弥生時代中期末には、丹後半島に近畿地方でも最大級の玉作り集落、奈具岡遺跡なくおかが出現します。奈具岡遺跡では、緑色凝灰岩を使った管玉くだたまを大量に生産する一方で、水晶やガラスなどの新しい材料を使った玉作りもいち早くはじまりました。

弥生時代後期には大宮町左坂墳墓群や園部町狭間墳墓群はさまなどでみられるように、当時では貴重であったガラス小玉を大量に副葬するようになります。

さらに古墳時代になると、弥生時代に比べて大きな玉が作られるようになり、ガラス玉も珍しいものではなくなります。また、小さな古墳からも玉が出土することから玉を身につける人々が増えたことを示しています。



玉を作るための工房跡(弥栄町奈具岡遺跡)

さまざまな装身具

装身具は、玉だけではありません。縄文時代では、耳飾りや腕輪、櫛などがありました。弥生時代でも同じように腕輪・櫛などの装身具がありました。また、岩滝町大風呂南1号墓おおぶろみなみで出土したガラス釧くしろ(巻頭カラー参照)や銅釧どうくしろなどの腕輪のように、全く新しい材質による装身具が作られました。

古墳時代後期になると、金メッキを施した装身具が現れます(金環=イヤリングなど)。



棺におさめられた鏡・玉類(福知山市ヌクモ2号墳)

玉の大集合

ここでは、縄文時代から古墳時代にかけての玉や装飾品を集めてみました。縄文時代には、石や動物の骨などで玉や身体を飾る装飾品を作っていました。弥生時代以降になると、緑色凝灰岩や碧玉、水晶、瑪瑙、ガラス、滑石などを材料としたさまざまな玉が作られました。玉にはまがたま勾玉・まりこだま管玉・なつめだま切子玉・棗玉・小玉など、たくさんの種類があります。



縄文時代の耳飾り・石製装飾品
(舞鶴市志高遺跡・大江町そうご三河宮みやのしたノ下遺跡・亀岡市千代川遺跡)



園部町狭間 12号墓のガラス小玉



綾部市私市円山古墳の
勾玉・管玉・小玉
(綾部市教育委員会提供)



山城町てんじくどう天竺堂古墳の
勾玉・管玉・ガラス小玉



弥栄町ふこう普甲 1号墳の勾玉・棗玉



野田川町やすみば休場古墳の
管玉・切子玉



丹後町高山 3号墳の
勾玉・管玉・切子玉



高山 12号墳の勾玉・
管玉・切子玉・小玉・金環



玉作り関係遺物(久御山町市田齊当坊遺跡)

玉作り

玉作りは根気のいる作業でした。キャラメル箱ほどの材料を小割にして、砥石で磨いて仕上げます。切断には石ののこぎりも使っていました。

水晶の玉作りでは、鉄のタガネを使ったようです。

出土した玉のみごとな完成度から、玉作りには高い技術が必要であったことがわかります。



水晶製玉類の製作工程(弥栄町奈具岡遺跡)



岩滝町大風呂呂南1号墓の銅釧

鏡

鏡は、弥生時代から古墳時代にかけては化粧道具けしょうというよりも呪術的な権威の象徴とされていました。特に中国製の鏡は貴重なものとされていました。

しかし、奈良時代以降になるともっぱら現在と同じような化粧道具の一つになったようです。



福知山市ヌクモ2号墳の竜虎鏡



木津町瓦谷1号墳の獣首形鏡

展示品リスト

遺跡名	所在地	遺物名	点数	時代	保管者
鳥取城跡	久美浜町	石鏃・剥片	3	旧石器	久美浜町教育委員会
天王山古墳群	〃	振文鏡	1	古墳時代	〃
浅後谷南遺跡	網野町	刀子形模造品	1	古墳時代	当調査研究センター
		木製品	5	古墳時代	〃
		竪櫛	1	古墳時代	〃
		八稜鏡	1	平安時代	〃
横枕遺跡	〃	土器・陶磁器(緑釉陶器・青磁ほか)	8	奈良～平安時代	〃
		銅製帯金具	1	奈良～平安時代	〃
平遺跡		縄文土器(後期・晩期)	6	縄文時代	丹後町教育委員会
		玉類	5	縄文時代	〃
高山12号墳	丹後町	環頭太刀柄頭	1	古墳時代	〃
		太刀類	3	古墳時代	〃
		玉類	58	古墳時代	〃
		耳環	7	古墳時代	〃
高山3号墳	〃	玉類	18	古墳時代	〃
奈具岡遺跡	弥栄町	玉作り関係資料	一括	弥生時代	当調査研究センター
愛宕神社古墳	〃	四獣鏡	1	古墳時代	〃
普甲1号墳	〃	玉類	一括	古墳時代	〃
普甲4号墳	〃	玉類	一括	古墳時代	〃
菩提東古墳	〃	鋸歯文鏡	1	古墳時代	〃
奈具岡北1号墳	〃	初期須恵器	6	古墳時代	〃
		銅釦	2	古墳時代	〃
遠所遺跡	〃	製鉄関係遺物	一括	奈良～平安時代	〃
シミズ谷城	〃	銅製おもり	1	室町時代	〃
金谷1号墓	峰山町	玉類	一括	弥生時代	峰山町教育委員会
赤坂今井墳丘墓	〃	弥生土器	2	弥生時代	当調査研究センター
		鉄器	6	弥生時代	〃
古殿遺跡	〃	木製案	1	古墳時代	〃
左坂墳墓群	大宮町	玉類	一括	弥生時代	京都府立丹後郷土資料館
左坂C21号墳	〃	振文鏡	1	古墳時代	大宮町教育委員会
左坂D8号墳	〃	玉類	一括	古墳時代	〃
通り2号墳	〃	玉類	一括	古墳時代	当調査研究センター
阿婆田窯跡群	〃	須恵器 環状平瓶	1	奈良～平安時代	〃
左坂経塚	〃	鏡	1	平安末～鎌倉時代	大宮町教育委員会
		経筒外容器	2	平安末～鎌倉時代	〃
桑原口遺跡	宮津市	ガラス製勾玉	1	弥生時代	宮津市教育委員会
宮津城跡	〃	オランダ陶器	1	江戸時代	〃
大風呂南墳墓	岩滝町	ガラス釦(レプリカ)	1	弥生時代	岩滝町教育委員会
		銅釦	4	弥生時代	〃
		玉類	一括	弥生時代	〃
休場古墳	野田川町	玉類	一括	古墳時代	野田川町教育委員会
温江遺跡	加悦町	木製梯子	1	弥生時代	加悦町教育委員会
蔵ヶ崎遺跡	〃	石のみ	1	弥生時代	〃
志高遺跡	舞鶴市	縄文土器(早期・前期)	6	縄文時代	舞鶴市教育委員会
		块状耳飾り	1	縄文時代	〃
		石剣	2	弥生時代	〃
浦入遺跡	舞鶴市	製塩土器(支脚含む)	12	奈良～平安時代	〃
三河宮ノ下遺跡	大江町	土偶	1	縄文時代	京都府立丹後郷土資料館
		石製装飾品	7	縄文時代	〃
青野遺跡	綾部市	石小刀	2	弥生時代	綾部市教育委員会
		石鏃	3	弥生時代	〃
奥大石2号墳	〃	蛇行剣	1	古墳時代	〃
私市円山古墳	〃	甲冑	1	古墳時代	〃
		武器類	3	古墳時代	〃
		玉類	一括	古墳時代	〃
ヌクモ2号墳	福知山市	鏡	1	古墳時代	〃
		玉類	一括	古墳時代	〃
高田山経塚	〃	青白磁小壺(蓋付)	2	平安末～鎌倉時代	〃
		土師製経筒(蓋付)	4	平安末～鎌倉時代	〃
豊富谷丘陵遺跡	〃	四乳文鏡	1	古墳時代	〃

興・観音寺遺跡	福知山市	分銅形土製品	2	弥生時代	福知山市教育委員会
		木製かんざし	1	弥生時代	〃
鳥谷4号墳	京北町	須恵器 三足壺	1	古墳時代	当調査研究センター
塩谷5号墳	丹波町	巫女形埴輪	1	古墳時代	丹波町教育委員会
狭間墳墓群	園部町	玉類	1	弥生時代	当調査研究センター
平山3号墳	〃	銅鏡	1	古墳時代	〃
小谷17号墳	八木町	玉類	一括	古墳時代	八木町教育委員会
		耳環	4	古墳時代	〃
池上遺跡	〃	鈴	1	平安時代	当調査研究センター
鹿谷遺跡	亀岡市	石剣	1	弥生時代	亀岡市教育委員会
		有舌尖頭器	1	縄文時代	〃
太田遺跡	〃	石剣	1	弥生時代	〃
北金岐遺跡	〃	弥生土器(蔓巻)	1	弥生時代	〃
余部遺跡	〃	玉作り関係資料	一括	弥生時代	〃
		鉄鋌	3	古墳時代	〃
千代川遺跡	〃	有舌尖頭器	1	縄文時代	〃
		球状耳飾り	1	縄文時代	〃
		墨書土器	6	奈良～平安時代	〃
		木簡	1	奈良～平安時代	〃
		石帯	1	奈良～平安時代	〃
篠窯跡群	〃	須恵器	8	奈良～平安時代	当調査研究センター
		緑釉陶器	5	奈良～平安時代	〃
平安京跡	京都市	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器	10	平安時代	〃
		軒丸瓦・軒平瓦	6	平安時代	〃
		中世土器・陶磁器	一括	鎌倉～室町時代	〃
		近世土器・陶磁器(華南三彩盤)	一括	安土桃山時代	〃
聚楽第跡	〃	金箔瓦	5	安土桃山時代	〃
長岡京跡	京都市	木櫃・銅印	2	奈良～平安時代	〃
	向日市	木印	1	奈良～平安時代	向日市教育委員会
	〃	軒丸瓦・軒平瓦	4	奈良～平安時代	当調査研究センター
	長岡京市	ナイフ形石器	2	旧石器時代	〃
十三遺跡	長岡京市	ナイフ形石器	1	旧石器時代	長岡京市教育委員会
舞塚遺跡	〃	ナイフ形石器	2	旧石器時代	当調査研究センター
雲宮遺跡	〃	弥生土器(前期)	6	弥生時代	〃
芝山遺跡	城陽市	翡翠製勾玉	1	古墳時代	城陽市教育委員会
		石帯	1	奈良～平安時代	〃
市田齊当坊遺跡	久御山町	石剣	6	弥生時代	久御山町教育委員会
		玉作り工具類	1	弥生時代	〃
		和鏡	1	鎌倉時代	〃
備前遺跡	八幡市	弥生土器(後期)	6	弥生時代	八幡市教育委員会
内里八丁遺跡	〃	須恵器(托形須恵器含む)	4	奈良～平安時代	〃
		土師器	3	奈良～平安時代	〃
		石帯	1	奈良～平安時代	〃
		銅製帯金具	1	奈良～平安時代	〃
		木製横櫛	1	奈良～平安時代	〃
森垣外遺跡	精華町	滑石製模造品	3	古墳時代	当調査研究センター
		須恵器・土師器	6	古墳時代	〃
椋ノ木遺跡	〃	瓦器・土師器・白磁	8	平安末～鎌倉時代	〃
天竺堂古墳	山城町	銅鏡	1	古墳時代	山城町教育委員会
		玉類	一括	古墳時代	〃
木津城山遺跡	木津町	破鏡	1	弥生時代	木津町教育委員会
		素文鏡	1	弥生時代	〃
瓦谷遺跡	〃	古式土師器	6	古墳時代	〃
瓦谷1号墳	〃	甲冑	1	古墳時代	〃
		獸首形鏡	1	古墳時代	〃
瓦谷古墳群	〃	埴輪	3	古墳時代	〃
瓦谷埴輪窯	〃	埴輪	1	古墳時代	〃
上人ヶ平遺跡	〃	埴輪	5	古墳時代	〃
釜ヶ谷遺跡	〃	墨書人面土器・土馬	5	奈良時代	〃
弓田遺跡	〃	埴輪	2	古墳時代	〃
奈良山瓦窯跡群	〃	軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・瓦塔	8	奈良～平安時代	〃
樋ノ口遺跡	木津町・ 精華町	二彩・三彩	5	奈良～平安時代	〃



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター設立20周年記念特別展覧会

京都・時を旅して

発行日/2000年10月1日

編集・発行/ (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel.075-933-3877(代) Fax.075-922-1189

印刷/ 中西印刷株式会社
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel.075-441-3155(代) Fax.075-417-2050

主催 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
共催 京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館
協賛 向日市文化資料館